

困難な時代に与える勇氣

寄稿

『失われた時を求めて』の作家プルーストは、一八七二年七月十日、パリに生まれた。生誕百五十周年の今年、出版や行事が自自押しだ。その最大の目玉は、本作の初稿「七五枚の草稿」（四百字詰め原稿用紙で約二百枚相当）とその関連原稿が、プルーストの初期作品を一九五〇年代に発掘した研究者ルナール・ド・ファロワの遺品中から発見、出版されたことである（ナタリー・モリヤック編、ガリマール刊）。

これを読むと、少年期のふたつの散歩道、海辺のホテルの客や女たちとの出会い、貴族名への夢想、ヴェネツィア滞在など、主要な挿話の誕生の瞬間に立ちあつていける。なかでも興味ぶかいのは、少年「私」の母親との悲しい別離を象徴するお寝みのキスの初稿である。

そこでは「私」の母親がジャンヌ、祖母がアデルと、プルーストの母方ヴェイユ家のユダヤ人家族の名が記され、舞台はセーヌ川右岸のオートウイユ、つまり母方のルイ大叔父の屋敷と明示される。

小説冒頭の田舎町コンブレーは、父親の故郷イリエ（パリの南西約百キロ）から想を得たものとする定説に修正をせまる記述である。それゆえ筆者は近作の新書で「オートウイユとイリエは、『失われた時を求めて』のコンブレーのモデルとなった」と記した。またヴェイユ一族を埋葬するユダヤ人墓地に触れたプルーストの手紙に言及し、作家のユダヤ意識がいかに小説に反映しているかを考察した。

この初稿で衝撃的なのは、お

プルースト生誕150年現代への指針

吉川 一義（仏文学者）

よしかわ・かずよし 1948年生まれ。京都大学名誉教授。『失われた時を求めて』を全訳（岩波文庫、全14巻）。新刊に『失われた時を求めて』への招待（岩波新書）。

寝みのキスをしてくれた母親の「愛らしい端正な顔」とともに、「甲いのベッド」に横たえられ「あらゆる苦痛」を「拭い去られた」亡き母の顔が想起されることだろう。長篇でこの顔は「甲いのベッド」に横たわる祖母の「うら若い少女のすがた」へ転化される。祖母の病氣と死の原点には、消された母の死が存在したのである。

ほかにもルイ大叔父が、女好きのユダヤ人スワンのモデルであつたことなど、新たな発見は尽きない。

『失われた時を求めて』は、マルクス主義者サルトルの時代には、パリの上流貴族を描いた小説として軽蔑された。その後一九六〇〜七〇年代には、プル



マルセル・プルースト（1871〜1922）

ーストを作品至上主義の先駆と仰ぐ新しい批評によって、高尚な聖典に祭りあげられ、一般読者から遠ざけられた。

時は移り、いまやプルーストの小説をあるがままに受容できる時代になつたのではないか。標榜するのがマルクス主義であれ民主主義であれ、あらゆる国に虚言と隠蔽がはびこる。この不信の時代を予見したかのように、プルーストの辛辣な皮肉は、上流貴族ばかりかブルジョワにも庶民にも及ぶ。ドレフュス事件（反ユダヤ主義による冤罪）や第一次大戦の変遷につれ、あらゆる階級の主張が筋操なく移ろつてきた。プルーストは、「軽蔑されるのが最も辛いのでわれわれがいちばんよく嘘をつく相手」は「われわれ自身」だと、人間の自己欺瞞をも暴き出す。

敵密なことほくのプルーストの信頼も、現代への指針となる。ドイツ軍によるパリ空襲下、敵は「無力と化した」と書きたてるマスコミの戦争プロパガンダに憤慨する作中のシャルリュス男爵は「文法や論理学を擁護する人たち……」が大きな災禍を回避してくれたことは、五十年経つてようやくわかる」と言つた。

人間と社会の真実を究めようとするプルーストの小説は、困難な時代の読者にかきりない勇氣を与えてくれる。ソ連の強制収容所において記憶に残るこの大作を語ることで生きのびたチャプスキの例もある（『収容所のプルースト』）。「真の人生、ついに発見され解明された人生……それが文学である」と信じる作家の探究が、全篇を貫いているからである。